

大きなステージ。体の何処にも力が入っていないく、ただ気持ちよく響いている声。二階席まで広がるハーモニーの輪。心地よい余韻が残る場内。割れんばかりの拍手の中、私はほんの少しだけ、泣いてしまいそうになりました。

創立65周年記念演奏会。それは合唱団にとっても私にとっても、大きな節目となる演奏会でした。昨年5月、間宮先生と野平先生を迎えて開かれた、チクルス Part I から早1年。瞬く間に過ぎて行った時間ですが、本当に充実していて心身共に成長出来た時間だったと思います。この1年間は、「北とぴあ 合唱フェスティバル」から、9月の「青葉会研究発表会」「第九コンサート」と本当に色々な経験をさせて頂きました。そしてまた、リーダーとしての責任をひしひしと感じた1年間でもありました。

11月頃から本格的にポリフォニーの練習に入り、菅野先生のレッスンも段々と増えてきました。練習生の頃からポリフォニーには触れてきましたが、やればやるほど、底の見えない奥深さに圧倒されました。ブルガリアの曲や、間宮先生の曲とはまた違う難しさです。でも、根底は同じ。発声がまずあって、それが技術や歌い方の基盤となっていきます。私は、毎回のお稽古で、真剣に発声練習に取り組んで来ました。中間の音で横から入ってしまったり、チェンジがうまく行かなかったり、そういう悪い所を自分で見つめ、先生方から頂いたアドバイスをヒントにどんどん改善していくことが出来たと思います。またこの1年間の合唱練習の中で、発声練習は声を整えることと同時に、「こころ」を整える時間でもあるのかな、と身にしみて思うようになりました。そこは、ひとりひとりが自分の声に向き合い、自分自身の問題点に全力で向き合う場所だからです。発声が上手く行かない時は、やっぱりこころに何か、もやもやがあり、自分と真剣に向き合えなくなっているのだと、私は思います。先生が昔から仰っていた「声はこころが出るよ」という言葉。高校生になって、その言葉が今までの解釈よりも、もっと簡単な言葉で、もっと実感として分かった気がします。先生方から教わったことが、年を取っていく中で（と大袈裟に言っても、まだ17歳ですが）また違う解釈が生まれてくるようでした。また思い返してみると、逆に、その年齢でしか分からない解釈もあるように感じます。そう考えると、先生方は私の年齢、性格、状況も理解した上で、一番適切な表現でアドバイスをして下さったのだな、と感慨深く思います。本当にありがとうございました。

初めての菅野先生のレッスン。そこには、今までとは違う苦労がありました。何かを極めた人の前で歌うということは、自分を試されることでもあります。それは、どんな時でも、たとえ指揮者が他の先生だとしても、いつもの静児の発声で歌えるか、ということです。これが一番、大変だったことだと思います。

はじめの頃は、私は自分が歌うことで精一杯でした。発声ノートや、楽譜に書いた先生から教わったことを思い出しながら、一生懸命歌いました。ポリフォニーでも、前のように音が下がったり、お腹が抜けたりということがなくなり、自分でも発声が変わったな、と実感しました。ですが、これはリーダーとしての役割をちゃんと果たせてはいませんでした。中学の頃に私がサブリーダーになった時、「小さい子の面倒を私はまだ見られないから、今は自分の歌に集中させて下さい」と先生にお願いしたことがあります。まだ歌も満足にうたえて

いなかったの、まず歌を頑張りたいと思ったのです。そのとき（というよりも、私がそう言い出す前から）、先生も私の気持ちを分かって下さり、温かく対応して下さいました。あのときからの積み重ねが、今の私を作っていると思うと、先生の御心遣いに感謝します。そして今。私には、自分だけのことでなく、他のメンバーにも気を配る必要があります。このままでは、中学の頃から何も進歩していないと悔しくもなりました。自分の歌に集中させて下さったあの時があるからこそ、今は合唱団のことを考え、時には厳しいことも言わなくてはならないのだと思いました。裕子ちゃんが言っていた「リーダーは汚れ役」という言葉が、またずしりと大きな意味を持ってくるように感じました。

1月、2月。ポリフォニーの練習も神髄に入ってくる重要な時期。中学生の中で、大きなこころの問題が出てきました。本物の音楽、価値ある大人に出会った時、そこに怯えて萎縮してしまう小さな自分と、それを誤魔化そうとしたり、見栄を張ったりする、もっともっと小さくてちっぽけな自分が、出てきてしまったのだと思います。でも、今思えばポリフォニーを歌う上で、大事な時期だったと感じます。そして私自身、偉そうなことも、たいしたこと何も言えませんでした。私の考えは先生と共にあると思い、高校生なりの表現で伝えられたかな、と思っています。そこから、歌の中で声かけが出来てきたように思います。自然と言えるようになっていました。中学生に対して言いやすくなったのと、中学生も真剣に受け取ってくれ、自分たちなりに返してくれるようになったからだと思います。私自身の大きな課題であった「他のメンバーへの気配り」が出来ようになりました。先生、中学生から時間はかかりましたが、本当にありがとうございました！

3月は、怒濤の様に流れ、「ヴィヴァルディが見た日本の四季」の練習や、「小さい星座」のクラリネット伴奏の練習なども入ってきました。発声を大きく崩してしまったことが、本当に残念で、情けなく思いますが、先生方のおかげで克服出来ました。私たち自身のことを一番に思い、理解し、親身になって向き合っ下さる先生方に出会えたことに、私は本当に感謝します。そして、菅野先生、磯部先生、アンサンブル・ヴィリディスの皆様という「価値ある大人」に会わせて下さったことにも、本当に感謝でいっぱいです。

「源流から大海へ。」という大きなテーマの中で、合唱団の六十五周年の記念すべき演奏会にこうして、出演させていただいたことに本当に感謝しています。私はまだ17歳で、65年に到達するには、まだまだ先のことです。その歴史をすべて知り、感じることは無理ですが、こうして65年間変わらない精神のもとで、心に届く歌をうたうことが65年目という大きな節目に立つ私たちに来ることだと思います。源流から流れる水が、やがて大海に辿りつくように、高校最後の年、これから社会に出て行く渦中で、不安も沢山あります。荒波に飲まれたり、嵐に会うこともあるでしょう。ですが、そういうときも合唱団での現役生活を糧に、私は乗り越えていけると思います。

大好きな合唱団。大好きな先生方。大好きな仲間。一生かかっても勝るもののない宝物に17歳で出会えた幸せにこころから感謝したいです。世の中に偶然はなく、あるのは必然だけだと、世に言われますが、私はこの出会いを必然だと思っています。この合唱団に入団させてくれ、高校三年生の今まで続けさせてくれた両親に感謝し、最後の高校生活を充実させ、良い受験が出来るようにしたいと思います。

先生方、本当にありがとうございました。そして、これからもどうぞ宜しくお願いいたします。